

# 英語教育

※2019年11月1日に、文部科学省から、  
2020年度の大学入試における英語民間試験活用のための  
「大学入試英語成績提供システム」の導入の見送りが発表されました。

なぜ、4技能が求められるのか

# グローバル化の進展

- 日本国内で働く外国人

2008年	▶	2017年
約49万人		約128万人

- 海外で暮らす日本人

2004年	▶	2017年
約96万人		約135万人

多様な文化や言語を  
もった人たちと一緒に  
働く未来はすぐそこに

# 求められる英語力とは？

- 小中高を一貫した指標で目標設定
- 高校卒業時、  
CEFRのA2～B1レベル以上を目指す

## <CEFRとは>

欧州評議会が作成した、外国語の学習・教授・評価のための言語共通の参照枠組み。能力は「～ができる」というCAN-DOによりレベル定義されている。

レベルA2例：身近な範囲での日常会話ができる

レベルB1例：旅行時、起こりうる大半の情報に対応できる

# 英語教育、なにが変わる？

- 1 小学3・4年生で「外国語活動」が導入
- 2 小学5・6年生で「英語(教科)」が開始、  
成績(数値による評定)がつくようになる
- 3 中学・高校の英語授業は「英語で行うことを基本とする」
- 4 大学入学共通テストで  
「リーディングとリスニングが同じ配点」になる

# 1 小学3、4年生で「**外国語活動**」

- 年間授業時間：**35時間**（週1コマ程度）
- 英語の音声やリズムなどに慣れ親しむ
- 言葉としての面白さや豊かさに気づく
- 聞く・話すことの言語活動

2

## 小学5、6年生で「教科英語」

- 年間授業時間：70時間
- 成績（数値による評定）がつく
- 活字体の大文字、小文字の読み書き
- 語順への気付き
- 聞く、話す+文字指導（読む、書き写す）の導入



## 3

## 中学・高校の英語授業

- 中学・高校の英語の授業は「**英語で行うことを基本とする**」
- 高校では、さらに「**論理・表現**」の科目新設

英語の科目全体で「話す」「書く」を中心に発信力を強化し、スピーチ、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどを行う

## 個別大学入試における 「資格・検定試験」活用

多くの大学・短期大学の一般・推薦・AO入試で、  
「GTEC」のオフィシャルスコアが活用されている

大学入試採用数 **510** 校

※2018年10月現在（海外含む）/3技能受検の結果の採用校を含む

## 大学入試での活用パターン

- 書類審査
- 試験の代替
- 出願基準
- 加点
- みなし得点化 など